

# 大谷學報

第十三卷 第三號

## 五帖御文撰定より開版までについて

稻葉昌丸

五帖御文が實如上人の時に撰定せられ、證如上人の代に開版せられたことは、もはや今日これを疑ふべきでないが、撰定の事情は未だ明でない。撰定の臺本として用ひられた輯録は何でありたかも一の問題である。此問題を決するにつき撰定當時の五帖の定本を得る必要がある。私は本誌の本年一月號所載の小文に實如證判本と現行本との差異表を掲げて置いたが、實如證判本はすべて筆寫であるので、各本多少の寫誤あるを免れないから、可成多數の本を對校せぬとその定本を確め難い。

前表を作りたときこの點に遺憾あるを感じて、其後なほ二三の本を參考して、前表に訂正を加へた。また單に現行本といふても、東西兩派で多少の差異があるので不精確であるから、今度は證如開版本で對照した。實如證判本は尾張聖德寺藏四冊<sup>第二帖</sup>、越前最勝寺藏四冊<sup>第一帖</sup>、越中行德寺藏

二冊<sup>第一帖</sup>、豐田淨善寺藏第二帖、河内圓德寺藏第二帖、龍谷大學藏第四帖、御取ませ本では明治

二十六年大谷派本山の鑑定書を附しある複製本 第一帖全部第五、加賀本誓寺藏一帖一帖目二、三、五、六通、三帖目九、十三通、四帖目二、九、大阪光泉寺藏一帖二帖目六、七、十二通、三帖目九通、四帖目一、六、九、十、十二通、五帖目一乃至廿一通、  
十二通、五帖目一乃至廿一通、大阪光泉寺藏一帖十二、十三、十四、十五通、五帖目一乃至六、十四、十六通、を拜見した。證如開版本は大谷大學藏本によりた。

五帖御文實如證判本と證如開板本との差異表 (括弧内は證如本)

- 一ノ一 葉五〇。〇。〇。ウヒトモ(人) 3 オヒトラ(人) 二。〇。ハ(アルヒ) 五 オサ、エ(へ) 4 オマウセハ(申) 七。オヲトリ(オ)
- 一ノ二 5 ウマダ(又) 6 一。ウ座臥(坐)
- 一ノ三 7 オワレラ(我等)
- 一ノ四 8 二。ウ義(儀) 五。ウ義(儀) 七。ウ候(サフラフ) 9 オワレラ(我等) 三。ウ義(儀) 10 オ義(儀) 二。ウ義(儀) 四。ウ候(サフラフ)
- 11 七。ウ候(サフラフ) 12 三。ウ候(サフラフ) 七。ウ候(サフラフ) 三。ウ候(サフラフ) 四。ウ候ヒ(サフラ) 13 オヘキカ(ヤ)
- 一ノ五 13 七。ウコトノホカ(事外) 14 一。オアヒタ(間) 二。オコノ(此) 三。オコノ(此) 六。オコノ(此) 一。ウヒト(人)
- 三。ウサイハイニ(幸) 四。ウウチニ(中) 六。ウコノロモト(心元) 15 二。ウマウス(申) 耳。ヲ(ミ、) 四。オコトヲ(事) 六。オ座臥(坐)
- マウサル(申) 四。ウ義(儀) ヒト(人) 五。ウマウスヘキ(申)
- 一ノ六 16 二。ウ候(サフラフ) 三。ウ候ヘハ(サフラ) 五。ウ候ヘハ(サフラ) 七。ウ候(サフラフ) 五。ウ候トモ(サフラフ) 六。ウ候ヘキ(サフラフ)
- 17 四。ウ候(サフラフ)
- 一ノ七 18 一。オ去ヌル(サン) 一。ウ候(サフラフ) 19 二。ウ候(サフラフ) 三。ウ候(サフラフ) 三。ウ候ヘハ(サフラ) 20 一。オ二心(フタゴ、ロ)
- 三。ウヒト、ハ(人ト)

- 一ノ八 22 ウ志賀ノ(除ノ) 23 ウヒトノ(人々)
- 一ノ九 24 オヒト(人) ウワカ家(我) マウシ(申) ウワカ流(我) 25 オヒトノ(人ト) オワカ宗(我) 四〇 ヒトノ(人) ウヒ
- ト(人) ウワカ流(我) ウマタ(又) ヒトノ(人) 27 オコノ分(此)
- 一ノ十一 32 オ榮花(華) ウ三途(塗)
- 一ノ十二 是モ超勝寺ニテ(證如本コノ肩書ナシ。第十三通トス)
- 一ノ十三 是ハ超勝寺ニテ(肩書ナシ。第十二通トス)
- 一ノ十四 是モ超勝寺ニテ(肩書ナシ)
- 一ノ十五 40 ウワカ流(我) 42 ウマウス(申) 43 オマタ(又) ウ座臥(坐)
- 二ノ一 4 オ給ヘシ(給フ)
- 二ノ二 5 ウサキト(先) 6 オワレラカ(我等) ヤウナル(様) ウマタ(又) 四〇 ウマタ(又) ウフタコ、ロ(二) ヒトヲ(人)
- 七〇 ヒトヲ(人) 7 オヒトヲ(人) ウヒト(人) 七〇 ヒトノ(人々) 8 オマタ(又) ウヒトノ(人ト) ウヒトノ(人ト)
- 二ノ三 9 オヒトモ(人) マタ(又) ウ條(條) 10 オ条(條) ム子ヲ(旨) オヒトノ(人々) 四 第三之(ノ) オコロヨリ(比)
- 同キ(オナシ) オ下句之(ノ) ウコノ(此) ウ条(條) 11 オマウスハ(申) 12 ウマウス(申) 13 ウイノチ(命)
- 二ノ四 14 ウマウスハ(申) ウシカレハ(然者) ナニト(何) コ、ロヲモ(心) 15 オナニト(何) オサラニ(更) 五 オマデマツリ
- テ(奉) ウタマヘリ(給) 16 オタマフ(給) オカルカユヘニ(故) オトキハ(時) ウマウスヘキ(申)
- 二ノ五 18 三〇 オヒトハ(人) 五〇 ヒトハ(人) オマタイロニモ(又色) ウヒト(人) 三 ウワレラカ(我等) 19 オヒトマ子(人) 二 オコノ
- 分(此) オナカノ(中々) 19 ウ而巳(除假名)

二ノ六 20 オヒトヲモ(人) 三 義(儀) ウマタ(又)

二ノ七 22 オ今時(イマノトキ) オソモ(抑) ウコトハリ(理) 23 オイノチ(命) ウマタ(又) 24 オヒト(人) オタテマツ

ル(奉)

二ノ八 24 ウラレラ(我等) 25 オマウスハ(申) ウ二モ三モ(フタツモミツ) 26 オチンコロ(ム) ウラカ身(我) ウツミ(罪)

七 ウラレラカ(我等) 27 オ座臥(坐) クチニ(口) ウヒト(人ト)

二ノ九 29 ウラカ身(我) ウラモムク(オ)

二ノ十 31 ウマウスハ(申) ラカ身(我) 32 ウイノチモ(命) 33 オ義(儀) オ勉勞(功) 34 オソレ(夫) マウスモ(申) ウマタ

(又) 35 オヒトヲ(人) オヒト(人ト)

二ノ十一 36 オラレラカ(我等) ウマタ(又) ウヒト(人)

二ノ十二 28 ヲ義(儀)

二ノ十三 40 オヒトノ(人) オラカ宗(我) ウヒトハ(人ト) 41 オラカ身ハ(我) 42 オラカ身ノ(我) ウ御カタ(方) 43 オヒ

トハ(人) オマウシ(申)

二ノ十四 44 オヒトノ(人) オソモ(抑) ウラレラ(我等)

二ノ十五 46 ウソノホカ(其外) ウタマフ(給) 47 オヒトノ(人々) オタマフニ(給) ソノ理(其) オラカ本宗(我) オソ

ノ(其) オコト(事) ウラカ一宗(我) ウヒト(人) ウソレ(夫) ウラカ身(我) ウタマヘル(給) 48 オタテマツリテ

(奉) オタマフヘシ(給) オコトハ(事) ウコトニハ(事) ウタテマツル(奉) 49 オタテマツル(奉) ウタテマツル(奉)

三ノ一 1 オソノ名(其) オマタ(又) ヒトモ(人) オヒトニ(人) オナニノ(何) ウヒトスチ(一) ウタテマツル(奉) ウマ

ウスハ(申) マダ(又) ウワレラ(我等) 2 オマウス(申) ウホトケ(佛) 二タマフ(給) ウワカ身(我) コト(事)  
 四フタコ、ロ(二) ウツタカフコ、ロ(疑フ心) ウフタツノ(二) 3 オコノ(此) オコノ(此) オタテマツレハ(奉)  
 七コノ(此) ウフタツラ(二) 4 オワレラカ(我等) オコノ(此) オコトヲ(事)  
 三ノ二 5 オヒト(人) オイマノ(今) トキノ(時) ウワレモ(我) 6 オコト(事) 7 ウタマヒテ(給) 8 オヒトノ(人)  
 オワカ一宗(我)

三ノ三 9 ウマウスハ(申) ウマタ(又) ウコトヲ(事) 10 ウヒト(人) 11 ウヒトノ(人々)

三ノ四 13 オマウス(申) オナカニ(中) 15 オマウス(申)

三ノ五 15 オマウスハ(申) 18 オワカ身(我) 三マウスハ(申) オヒトツ(二)

三ノ六 20 オマウスハ(申) 21 オマタ(又) 22 ウ座臥(坐)

三ノ七 23 ウコトヲハ(事) ヒトモ(人) 24 ウコノ(此) 25 オツキニ(次) ウヒトハ(人) 26 オマウスヘキ(申)

三ノ八 26 ウアヒタニヲヒテ(問ニ於) ウワレハ(我) コ、ロエ(心得) オモヒテ(思) サラニ(更) ウヒトニ(人) ウヒト

(人) マコトニ(誠) 27 オスミヤカニ(速) オマコトニ(誠) ヤマニイリテ(山ニ入) オソノ(其) コトハ(詞) オソ

レ(夫) ハジメ(初) オワレラ(我等) コトヲ(事) 28 オソノコ、ロ(其意) オシヒテ(於) ワレラ(我等) オタマフ

(給) オトコロノ(所) ウコノ(此) ワレラ(我等) ウタマヒテ(給) ウコノ(此) ウワレラ(我等) カルカユヘニ(故)

五カタ(方) ウマウス(申) コノ(此) 29 オマタ(又) オコノ(此) オタマハサル(給) オマウス(申) オ七コノコト

(此事) ウヒトノ(人々) ウコトヲ(事) ウ座臥(坐)

三ノ九 30 ウヒトハ(人) 31 ウ符合(府合) ソレ(夫) 32 オマタ(又) ウヒト(人)

三ノ十 33 五〇 六〇 六〇  
オ条(條) 35 ウヒトラハ(人)

三ノ十一 41 一〇 一〇 一〇  
ウフルマフ(振舞) ヒトノ(人) 42 ヲオモムカス(ヲ)

三ノ十二 45 五〇 二〇 二〇  
オ義(儀) 46 ウモトホ(ヒ)

四ノ一 2 二〇 一〇 一〇  
オ義(儀) 4 ウキコエ(エ)

四ノ二 5 三〇 六〇 六〇  
オヒト(人) ウイママテ(今)

四ノ四 11 六〇 七〇 七〇  
ウカセ(風) ウリカ身(我) ウリカ身(我) 14 オツキノ(次) 15 オースチ(ヒト) 三  
ウマタ(又) オコトノハ(葉)

四ノ六 19 七〇 一〇 一〇  
ウ講者(ハ) 21 ウスナハチコレ(即是)

四ノ七 24 五〇 四〇 六〇  
ウ舊義(儀) 28 ウ条(條) ウ義(儀)

四ノ八 29 四〇 六〇 六〇  
オ講者(ハ) 32 オ心中ニ(ヲ) 33 オキコヘ(エ) 34 オ根源(元) 35 ウ条(條)

四ノ十一 40 二〇 三〇 四〇  
ウソモ(抑) ウラレラ(我等) ウマウスコハロ(申心) 41 オコハロ(心) 四  
ウラレラ(我等) オコハロウヘキモ

ノ(心得ヘキ物)

四ノ十二 43 六〇 六〇 六〇  
オヒトハ(人)

四ノ十三 44 二〇 三〇 三〇  
ウ御詞(コトハ) 45 ウ座臥(坐) ウヨハヒ(齡)

四ノ十四 47 二〇 二〇 二〇  
オ安心之(ノ)

四ノ十五 51 二〇 二〇 二〇  
オ本腹(復)

五ノ四 3 五〇 七〇 七〇  
ウ輩ハ(トモカラ) 4 ウ更ニ(サラニ) 5 オ奉ラン(タテマツ) 三  
オ所ヲモ(トコロ)

五ノ十一 15 六〇 六〇 六〇  
ウヒトノ(人)

五ノ十二 18 オヒトヲ(人) 19 ヲヒトハ(人)

五ノ十三 20 ウソモ(抑) 21 オマレヲ(我等)

五ノ十四 22 ウヒト(人) 六 六 上郎(薦)

五ノ十五 24 ウ一ツニテ(一ニテ)

五ノ十八 29 ウコトノ(事)

五ノ廿一 33 オ座臥(坐)

五帖目は比較的多数の本を拜見し得た爲か、是に二類あることを發見した。一は證如本と殆ど差異なく、僅に第十四通で上薦が上郎となり第廿一通で坐臥が座臥となりてある丈である。是は聖徳寺本及び最勝寺本で見るところで、餘本はみな又一類に屬するもので、前表に示す如く四通男子も女人もの章で漢字が假名になりあるもの四ヶ所、他の五章にて假名が漢字になりあるものすべて七ヶ所あり。男子も女人もの章の變化の理由を考ふるに、嘗て日下無倫氏が佛教研究——に此章の眞本三種を比較對照して大谷大學本が帖内に一致することを示されたが、上述四ヶ所の漢字假名字の變更によりて、大谷大學藏の眞本と一致することになる。此事は實如上人時代に撰定當初の五帖目に眞本によりて修正を加へたことを意味する。他五通の變更も同様の理由によるものと思ふ。

前四帖に於ける實如證如二本の差異を見るに、既に前論文に於て指摘した通り、實如本では漢字

の訓讀すべきは成るべく假名字に改めあるを見認めるが、是が證如本で漢字に復せられた。一帖目第五通、二帖目第十五通、三帖目第一通、第八通などがその著るしき例である。就中、一帖目第五通、二帖目第四通、四帖目第十一通の變更を見るに、五帖目と同じく眞本の形に復する修正と思はれる。此様の修正が實如時代に五帖目に於けると同じく前四帖に於ても施されたか明でない。少くも私の拜見した實如本では其形跡を見認め難い。

それで私は開版前即ち筆寫の證如本を二三調べてみた。

伊勢香取法泉寺藏本 墨附五十九紙 二十五通

(三ノ十三、一ノ二、三、六、九、十三、二ノ四、五、七、十一、三ノ三、四、六、十一、四ノ九、十、十一、十二、十五、五ノ一、四、十一、十六、十八) 證判は木版、諸章全部に既に修正が施されてある。

攝津鳥飼善勝寺藏本 十七通 證判は木版

(二ノ三、一ノ二、六、七、二ノ一、五、六、七、十二、三ノ二、四ノ四、八、九、十、十三、十五、五ノ十)

この中二ノ三、五、六、七、十二、三ノ二の六通は修正済であるが、一ノ二、六、七、四ノ四、八、十三、十五の七通は未修正のまゝである。



日下無倫氏藏本 八通 證判は墨書

(一ノ四、二ノ一、七、三ノ四、九、(此間に脱落あり)五ノ十九、廿一、廿二)

この中一ノ四、二ノ七、三ノ四は修正済、三ノ九は未修正なり。

龍谷大學藏本 墨附五十三紙 十六通

(二ノ六、一ノ一、二、四、五、六、七、八、九、十、十一、十三、十四、十五、二ノ一、四ノ六)

# 證判墨書

この中一ノ六は少々疑はしいが、他章はすべて未修正なり。

右四帖中の既修未修の明なるものを表示すれば

	一帖目	二帖目	三帖目	四帖目
既 法泉寺本	二、三、六、九、	四、五、七、八、九、	三、四、六、七、	二、三、
修 善勝寺本	四、	三、五、六、七、八、	二、四、	二、三、
未 善勝寺本	二、六、七、			四、八、九、
修 龍谷大學本	一、二、四、五、七、八、九、十、		九、	六、

右表によると、調査材料が少いので充分明了ではないが、證如時代に帖内御文の修正が漸次に行はれて、ある御文は早く、ある御文は遅く修正せられたことは明である。斯くて開版本で前表に示

す如き變化を示すことになりた。

さて實如證判の五帖の定本が出来たとして、之を以て從來知られた輯録、高田本眞宗寺本及び名鹽本と對照して、その孰れに最もよく似てあるか。高田本には前四帖中で一帖目第三通及び四帖目第九通以下七通闕けてあり、此等が散佚したといはるゝ三帖中にありとしても、内容を調べると、前論に指摘し置いた通り、三本中で最も五帖御文と縁遠いものである。眞宗寺本では漢字の訓讀すべきものは大抵假名書きに寫してあるから、實如本に甚だよく似てある。殊に實如本の通り他屋が多屋に、風度が不圖に改めあるは、他本に見ぬ所である。五帖目初四通が帖内の順序の如く眞宗寺本第二號に收めあることは既に前論に指摘した。しかし眞宗寺本には散佚した數冊があり、現存第一號の一冊に收むる所で五帖と對照するに、僅に一帖目丈がある許りで、それも一帖目十三通が闕けてある。二帖目初通に當る御文も第一號中にあるが、之は高田本にあるのと同じく、帖内とは同形でない。四帖目第十一通に當る御文も第二號中にあるが、帖内と同形でない。然らば名鹽本は如何といふに、五帖全部の御文が禿氏祐祥氏の指摘の通り名鹽本に見出さるゝが、四帖目第十四通に當る御文は別の御文である。名鹽本は多少不注意に原本より寫された本であるから、漢字假名の區別など微細の點を比較し難いが、之は實如本よりは寧ろ證如本に近いと思はれる。其一例を擧げると四帖目第十一通の終に實如本では「コ、ロウヘキモノナリ」とあるのが證如開版本や名鹽本では「心

得へキ物ナリ」とある。それで想像するに、眞宗寺本より一轉したる、若しくは眞宗寺本が寫され  
たものと、輯録がありて、五帖撰定の臺本となりたのではあるまいか。尤もこの假定によると、名  
鹽本の性質が問題になる。私の見る所では、名鹽本は眞宗寺本より後に出來たものである。既に五  
帖撰定が出來た後に何の爲に此輯録が造られたか、之を解するに、五帖撰定後になるべく眞筆本の  
形を存する議が起り、今まで漏れたる眞筆本を諸方面より集めて臺本に大修正を加へ、かくて出來  
たのが名鹽本であらう。従つて五帖本も改訂せられて、遂に開版せられた。かく考へて、名鹽本に  
於て三首詠歌御文と八幡大菩薩御文とに同様の奥書が附してある事情も解せられると思ふ。今日知  
れてある材料では、五帖撰定の臺本問題はこれ以上其研究を進めることが出來ぬと思ふ。